石川・堅田（かただ）B遺跡

1　所在地　石川県金沢市堅田町
2　調査期間　一九九六年（平8）七月
3　発掘機関　金沢市教育委員会
4　調査担当者　谷口宗治・谷口明伸
5　遺跡の種類　居館跡
6　遺跡の年代　一三世紀～一五世紀
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

堅田B遺跡は、金沢市北東の丘陵地帯縁辺に立地する。遺跡の南に森下川（もりもと）が流れ、川に沿って古くから加賀と越中を結ぶ街道として利用された小原往来（おはらおうらい）を踏襲する国道三〇四号線が通過する。遺跡のある堅田町は東の丘陵を五kmも東進すれば礪波平野を一望する富山県福光町に抜け、南西へ七kmで加賀の中心である金沢城に至ることができる交通の要衝である。また、遺

（金　沢）

跡の北に位置する山は「城山」と呼称され、その頂には木曽義仲による築城伝説が伝わる「堅田城跡」が残る。遺跡は「城山」南後背面の斜面を森下川によって削平され形成された、粘性のきわめて強いシルト質土壌の河岸段丘上に立地する。

当遺跡は国道八号線バイパス工事に伴う事前調査により発見された新規の遺跡で、推定面積はおよそ五〇〇〇㎡に及ぶ。遺跡の性格は、出土した土師器・陶磁器類から、一三世紀前半頃から一四世紀中頃にかけて営まれた館跡とみられる。今回の発掘調査は、バイパス路線計画にかかる館中心部と南西部について実施した。遺構検出面の深さは現地表下〇・六～〇・八mで沖積平野の遺跡と比較してかなり深い位置に埋没していたことが窺われる。

遺構としては、五間×一〇間（二二七㎡）の「主殿」とみられる建物を検出し、これを中心として一辺が約一〇〇mの堀が四周をめぐり、一町四方規模とみられる。主殿北の空閑地には「脇殿」と考えられる四間×八間（一六八㎡）の建物が、また脇殿の東には井戸跡が検出されている。柱穴及び井戸の個数から、これらの主殿及び脇殿、井戸はそれぞれ二回の建て替えを行なっていることが確認された。

巻数板（かんじょういた）とみられる木簡は、館南西部の堀に取り付けられたL字形に展開する溝から検出された。L字溝は当初館をめぐる堀の一部であったものが、その後改変され埋められたものとみられる。木簡のほか多数の木製品及び土師器・陶磁器類を含むことから、廃棄土

坑として用いられたものと思われる。遺物総数はこの溝だけで土師器が整理用コンテナで三〇箱（土師器皿約三〇〇〇点）、木製品同四〇箱（箸状木製品一二〇〇点、ヘラ状木製品三〇〇〇点など）に及んだ。土師器及び箸状木製品は一括廃棄によるものと思われ、完形品がほとんどであった。巻数板はこの廃棄溝より合計三点出土した。うち二点は判読可能であったが、一点は上端部のみでほとんどを欠損しているため全容は不明で、ここでは二点について報告する。

同じ遺構からは、巻数板の他に卒塔婆一二点を検出している。ここでは判読可能な「南無大日如来」四点、「南無五大力菩薩」一点など、計六点について報告する。

8　木簡の釈文・内容

(1)

「
□願安穏万民□
□請人快楽□
□御時□
□国□
□中□
師福祚延長心中□
信心勢至比丘尼□
右年時御願部□
□造立大日□
□造讃仏菩薩□
□造讃金剛般若経二巻
□造讃仁王般若経七□
□書写般若心経一巻并□
□修年始御願目録
□御祈所。
般若心経
波羅揭諦
波羅揭諦
波羅僧揭諦×
呪即説呪曰
波羅揭諦
波羅揭諦
波羅僧揭諦×
」

162×820×7　011　第1号

(2)

「
摩訶般若波羅密多心経
観自在菩薩行深般若
波羅密多時照見五蘊
皆空度一切苦厄舎利子
色不異空空不異色
色即是空空即是色
受想行識亦復如是
舎利子是諸法空相
不生不滅不垢不浄
不増不減是故空中
無色無受想行識不
無眼耳鼻舌身意
無色声香味触法無
眼界乃至無意識界
無無明亦無無明尽
乃至無老死亦無老死尽
無苦集滅道無智亦
無得以無所得故菩
提薩埵依般若波羅
密多故心無罣礙無
罣礙故無有恐怖遠
離一切顛倒夢想究
竟涅槃三世諸仏依
般若波羅密多故得
阿耨多羅三藐三菩
提故知般若波羅密
多是大神呪是大明
呪是無上呪是無等
等呪能除一切苦真
実不虚故説般若波
羅密呪即説呪曰
羯諦羯諦波羅羯
諦波羅僧揭諦苦
□□可
」

112×790×7　011　第1号

(1)

(2)

(2)

(3)「〈南無五大力菩薩」　259×(40)×4　061

(4)「南〔無カ〕□×」　252×36×4　061

(5)「南無大日如来」　250×38×4　061

(6)「〈南無大日如来　(108)×25×5　061

(7)「〈南無大日如来　(174)×25×4　061

(8)「〈南無大日如来」　222×24×5　061

(1)(2)は巻数板とみられる木簡である。横材として使用され、木目と直交する方向に文字が記される。(1)は木目に沿って大きく三つに割れ、横材の一番下の部分（図の左端）の損傷が激しく、両端が欠損している。巻数板の上部左右に円形の穿孔処理がなされ、紐を通して吊るされていたものとみられる。墨痕は退色して消失、文字位置の浮き上がりによって判読が可能な状態である。記述内容は般若心経全文、「奉修年始御願書目録」及び「建長第三」（一二五一）云々の日付、「大法師善×」と続く。「奉修年始御願書目録」中に記載のある「一　奉造立大日□□□〔卒カ〕都婆廿五本」は「大日如来卒塔婆」と類推され、併せて検出された「南無大日如来」卒塔婆(5)～(8)など）との関連が注目される。中世の正月行事である「巻数板」奉納の際には、「般若心経」をはじめ経文各種の転読並びに卒塔婆

(3)

(4)

(5)

(6)

(7)

(8)

の奉納を行なっていたことが知られている。

(2)は、巻数板中央部に斜め方向の割れがある。巻数板の上部左右に円形の穿孔処理がなされ、紐を通して吊るされていたものとみられる。(1)と同様、墨痕は退色して消失、文字位置の浮き上がりによって判読が可能な状態である。記述内容は般若心経全文、「弘長三年（一二六三）正月八日」の日付、「大阿師」と続く。(1)で記述のある「奉修年始御願書目録」に相当する記述は見られないが、年号以下に「正月八日」とあり、修法実施日を具体的に特定できる点が注目される。

越後の国人領主であった色部氏に伝わる「色部家文書」では、巻数板奉納は正月八日に行なわれたと記述がある。また、『一遍上人絵伝』や『北野天神縁起絵巻』には、館の門に縄を張り、「巻数板」を吊るしてある風景が描かれている。この風習は、福井県大浜町や新潟県佐渡島に、村の入口に「巻数板」を正月八日に吊るす行事として伝承している事例がある（中野豈任『祝儀・吉書・呪符』）。今回の巻数板の発見は、考古資料と文献・絵画・民俗資料とが見事に一致した貴重な事例として、重要な発見といえよう。

(3)～(8)は(1)(2)と同じ廃棄溝から出土した卒塔婆で、関連する遺物とみられる。(3)は上端部に切り込みの入る卒塔婆。上方より中程まで、右端部が欠損しているが、墨痕の残りがよく文字の判読に支障はない。

(4)は完形の卒塔婆であるが、墨痕はほとんど退色し、最初の一文字が確定できるのみである。続く文字は「無五大力菩薩」か「無大日如来」と推測される。

(5)は(4)とほぼ同大の卒塔婆でこちらは墨痕の残りがよい。材質も(4)と同じであることから、同時期に作成された可能性が高い。

(6)～(8)は上端部に切り込みの入る形態の卒塔婆であるが、(3)～(5)よりは小型でまた、(3)～(5)が偏長な三角形の扇形を呈するのに対し、(6)～(8)は上方より中位まで長方形の短冊形に展開し、下で楔形に変化する形態となっている。字体・形状などから(6)～(8)の三点は、同時に作成された可能性が高い。(6)は下半部を欠損している。検出した卒塔婆の中では最も墨の残りがよく、全文を肉眼で判読できる。

(7)は下先端部を欠損するが、(6)とほぼ同じ規格と考えられる卒塔婆である。墨痕は他の卒塔婆に比べると残りがよく、肉眼で判読できる。

(8)は墨痕が辛うじて残り、凹凸による判読によるところが大きい。

なお、木簡の釈読は、国立歴史民俗博物館の平川南氏と、当教育委員会の谷口明伸が担当した。

（谷口宗治）